

国際社会学部—北西ヨーロッパ・北アメリカ地域

イギリスとアイルランド その社会と歴史を学ぶ意義と魅力

イギリスはかつて巨大な帝国を形成し、世界史の流れに大きな影響を及ぼしてきました。イギリスの歴史を学ぶことで、イギリスの帝国主義や植民地支配、産業革命、近代化の過程を理解することができます。また、アイルランドはイギリスとの複雑な関係を持ち、独自の文化や歴史を有しています。これらの知識は、歴史や国際関係、文化研究など、様々な分野で役立つことでしょう。

イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことは、西洋文化や英語圏の文化を理解する上で欠かせない要素です。イギリスはシェイクスピア、チャールズ・ディケンズ、ジェイン・オースティンなど、数多くの文学的巨匠を輩出してきました。また、イギリスの音楽、映画、ファッション、食文化なども世界的に影響があります。アイルランドにおいても文学、音楽、舞踏など、独自の文化的遺産があります。これらの文化を学ぶことで、英語圏の文化的な背景や価値観を理解し、多様な視点を持つことができます。また、英語圏の国で留学や就職を考えている場合にも、イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことは、現地の文化に溶け込む上で重要なアドバンテージとなるでしょう。

さらに、この地域について学ぶことは、政治や法律、社会的な問題に対処するための洞察を深める上で重要です。イギリスは議会制民主主義の先駆者と考えられており、法の支配や市民の権利の保護において重要な役割を果たしてきました。イギリスの政治制度や法律の発展、社会的な変革、労働運動などを学ぶことで、現代の政治や社会の仕組みを理解し、改革や政策提案に対する洞察を養うことができます。

そして、イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことは、文化的多様性や社会的包摂の重要性を学ぶことにもつながります。これらの地域は多くの移民の受け入れや文化的な交流を経験してきました。移民の歴史や多文化主義の概念を学ぶことで、多様性への理解と共生の価値を深めることができます。また、イギリスやアイルランドは宗教的な寛容さや人権の尊重にも注力してきました。その歴史的背景を理解することは、自己の意識や行動において、異なる文化や信念を尊重する能力を養うことに寄与するでしょう。

最後に、イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことは、批判的思考や研究能力の発展にも大いに役立ちます。これらの地域の歴史は、様々な視点や解釈が存在します。史料の分析や文献研究を通じて、客観的な判断力や論理的思考を養うことができます。また、社会的な問題に対しては、歴史的な文脈や背景を踏まえて考えることが重要です。イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことで、深い洞察と批判的思考を備えた意見や主張を形成する能力を鍛えることができます。

このようにイギリスやアイルランドについて学ぶことは、グローバルな視野を持ち、世界の多様性を理解するための重要な手段となります。これらの地域の歴史や文化は、国境を越えて多くの人々に影響を与えてきました。イギリスの英語や法制度、アイルランドの文学や音楽は、世界中で愛されています。イギリスやアイルランドの社会と歴史を学ぶことで、国際的な視野を広げ、異なる文化や背景を持つ人々との相互理解やコミュニケーション能力を発展させることができます。



http://modis.gsfc.nasa.gov/gallery/individual.php?db_date=2012-06-



大西洋奴隷貿易で栄えたイギリスの港湾都市プリストルには、奴隷貿易から得た富をもとに街の発展に寄与したエドワード・コルストンの彫像が立っていた。現在は、M シェッドと呼ばれるプリストル博物館の倉庫に横たわっている。



カンタベリー大司教座—597年創設の大聖堂。歴代イングランド国王の戴冠式を司る、イングランド教会の総本山。



オックスフォードの町と大学

北アメリカーその社会と歴史を学ぶことの意義と魅力

世界で最も影響力のある国の一つであるアメリカ合衆国とその社会について深く理解するために、その歴史を学ぶことは不可欠でしょう。アメリカ大陸には古代から先住民の豊かな営みがありましたが、ヨーロッパからの入植が進み、「アメリカ合衆国」という国ができたのは1776年に始まる独立革命の結果です。そこから20世紀に入るまでの間に、アメリカの領土は大西洋から太平洋まで広がり、二つの世界大戦における勝利によってその国際的な覇権は決定的なものとなりました。20世紀を指して「アメリカの世紀」と呼ぶのは決して誇張ではありませんでしたが、冷戦の時代を経て、その覇権には揺らぎが見られるようになりました。とはいえ、アメリカの歴史はその威信が低下しつつあるとしても、極めてダイナミックなものであることに変わりはありません。

アメリカの強みとはなんですか。あるいは、なんだったのでしょうか。国際関係を中心に考えるのであれば、経済力、軍事力があげられるでしょう。軍事力は、科学技術と密接に結びついています。核開発、宇宙開発からIT革命まで、アメリカを拠点とする科学者や企業家は、社会のあり方や私たちの価値観を大きく変える革新的な技術をうみだしてきました。

一方、アメリカ社会を具に観察するのなら、その強みはやはりそこに暮らす人々の多様性ではないかと思えます。アメリカは「人種のるつぼ」や「サラダボウル」などと称されてきましたが、建国以来、世界の異なる場所にルーツを持つ人々によって構成されてきました。そのなかにはもちろん、アフリカ大陸から連れてこられた奴隷とその子孫のように、筆舌に尽くし難いほどの困難に直面してきた人々もいます。アメリカ社会では現在まで、肌の色や人種、出自、性別、性的指向などによる様々な不公正がまかり通っています。そうした負の側面を抱えるがゆえに、「自由」や「民主主義」の実現を求める取り組みも繰り返されてきました。ジェンダーやセクシュアリティといった分析概念は、日本よりもアメリカ社会においてより広く積極的に用いられてきました。

アメリカ社会の多様性は、そこに暮らす人々の属性だけで語られるものではありません。世界中から多くの観光客が押し寄せるニューヨークやロサンゼルスはリベラルな土地柄で知られています。一方、アメリカ国外から保守層の多く住む南部や中西部を訪れる機会はあまりないでしょう。同じ国に暮らしていたとしても、人々の生活環境や政治意識は全く異なります。日本に暮らす私たちは、良くも悪くもアメリカの影響のもとで暮らしていることは否定できません。親米、知米、嫌米から反米まで、アメリカをめぐるさまざまな感情や思想を示す言葉があります。現代の日本社会において「アメリカ」を問うことは、「わたし」と「わたしが生きている空間」をよく知るための物差しを探す試みでもあるでしょう。大学での学びを通し、アメリカ社会のさまざまな多様性に目を向けることは、私たちの暮らす世界をよりよく生きる、そしてよりよく変えるための術を求めることに結びつくのではないのでしょうか。



首都ワシントン DC を流れるポトマック川沿いの貯水湖タイダル・ベイスンを取り囲む桜並木。日米友好の証として日本から 1912 年に贈られた。ワシントンでは毎年春に全米桜祭りが開かれている。